

2015年度「国際交流基金地球市民賞」受賞団体決定

違いを認める青少年の国際交流、伝統芸能の可能性拡大、定住外国人の自立支援
新たな国際文化交流のあり方を提案する東京、大阪、神戸の3団体が受賞

国際交流基金(ジャパンファウンデーション)は、国際文化交流を通じて、日本と海外の市民同士の結びつきや連携を深め、相互の知恵やアイデア、情報を交換し、ともに考える団体に「国際交流基金地球市民賞」(以下、地球市民賞)を授賞しています。今年度は134件の推薦・応募があり、外部有識者で構成される選考委員会による厳正な選考の結果、以下3団体を受賞団体に決定いたしました。

授賞式は、2016年3月1日(火)にザ・キャピトルホテル東急(東京都千代田区)で開催され、賞状と副賞200万円が受賞団体に贈られます。

<2015年度受賞団体> *以下都道府県順、敬称略。各団体の詳細は後頁ご参照

■特定非営利活動法人 Peace Field Japan(東京都千代田区、理事長: ^{むらはし やすゆき}村橋 靖之)

■公益財団法人 山本能楽堂(大阪府大阪市、代表理事: ^{やまもと あきひろ}山本 章弘)

■特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター(兵庫県神戸市、理事長: ^{きむ そんぎる}金 宣吉)

<国際交流基金(ジャパンファウンデーション)について>

国際交流基金(ジャパンファウンデーション)は世界の全地域において、総合的に国際文化交流事業を実施する日本で唯一の専門機関として1972年に外務省所管の特殊法人として設立され、2003年に独立行政法人となりました。文化交流、海外における日本語教育および日本研究・知的交流の3つを主要活動分野とし、世界の人々と日本人の間でお互いの理解を深めるため、さまざまな事業や情報提供を通じて人と人との交流をつくり出しています。

http://www.jpff.go.jp/about/outline/about_01.html

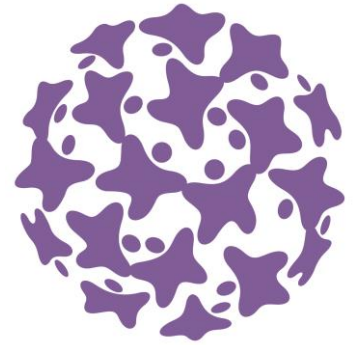
●主催者・本事業に関するお問い合わせ： 国際交流基金 コミュニケーションセンター (菅野、川久保)
Tel: 03-5369-6075 / E-mail: chikyushimin@jpf.go.jp

●広報用画像・取材に関するお問い合わせ： 日本パブリックリレーションズ研究所 (横田、妹尾、小笠原)
Tel: 03-5368-0911 / FAX: 03-5269-2390 / E-mail: japanfoundation@japan-pri.jp

【補足資料①】

<国際交流基金地球市民賞について>

国際交流基金(ジャパンファウンデーション)では、1985年に「国際交流基金地域交流振興賞」を創設して以来、全国各地で地域に根ざした先進的な国際文化交流活動を行っている個人や団体を顕彰してきました。本賞は、2005年に「国際交流基金地球市民賞」に改称され、これまでに94団体が受賞しています。



<授賞概要>

●対象活動:

- ① 文化・芸術による地域づくりの推進:日本と海外をつなぐ文化・芸術の交流を通じて、豊かで活気のある地域やコミュニティをつくる活動など
- ② 多様な文化の共生の推進:外国人の多様な文化(言語教育を含む)を理解、尊重し、ともに豊かで活気のある地域やコミュニティを築いていこうとする活動など
- ③ 市民連携・国際相互理解の推進:共通の関心や問題意識を通じ、日本と海外の市民同士の連携や相互理解を進める活動など

●対象団体:

公益性の高い国際文化交流活動を行っている日本国内の団体

●選考のポイント:

- ① 先進性:国際文化交流活動の一つのモデルとして、他の団体の参考となる活動であること
- ② 独自性:独自のアイデアを活かした活動であること
- ③ 継続性:少なくとも3年以上、着実な活動をしていきていること
- ④ 将来性:今後も着実に活発な活動が継続されることが見込まれること
- ⑤ 社会に対する影響力:社会的な広がりや浸透力のある活動であること

●表彰:

受賞団体には、正賞(賞状)ならびに副賞(200万円)を贈呈

【補足資料②】

<2015年度 地球市民賞受賞団体について> *以下都道府県順

■受賞団体 1: **特定非営利活動法人 Peace Field Japan**

～互いの違いを認め、乗り越え、共に生きる価値と意義を見出す～

【所在地】: 東京都千代田区

【代表者】: 理事長 村橋 靖之(むらはし やすゆき)

【設立】: 2009年(前身の「ピース・キッズ・サッカー」は2004年設立)

【ウェブサイト】: <http://www.peace-field.org>



<贈賞理由>

Peace Field Japan は2004年にイスラエル、パレスチナの子供たちを日本に招いて親善サッカーを行う「ピース・キッズ・サッカー」として発足した。その後ともに学びあえる内容を目指して2007年からイスラエルとパレスチナの女子高校生各4人、日本の女子高・大学生4人、計12人が山梨県小菅村で2週間共同生活し対話と交流を行う「“絆”KIZUNA プロジェクト～SATOYAMA for Peace～」を開始し、2009年に現在の名称に改称した。

KIZUNA プロジェクトは、以前学校だった建物を改築した宿泊施設において、村の子供やお年寄り、そば打ち、農業体験、森林作業、木工細工、夏祭りなどを通じて交流を図っている。

前身の招聘プログラムを含め2004年～2015年に3つの国・地域から154人の青少年が参加した。

対立する国・地域の若者と日本の若者を日本の里山に連れて行き、寝食を共にし、人と自然との調和や共生の精神を受け継ぐ里山の暮らしに触れる体験を共有することで、相互理解を深めていくという手法が先進的、独自のであり評価される。合宿中は政治の話をするのではなく、共に生活する体験を通じて、信条・伝統・文化が異なる人々が互いの違いを認め、それらを乗り越えて共に生きて行く価値や意義を見出し、他人の意見や話を辛抱強く聞く、相手を思いやる気持ちの大切さを学ぶ。

2014年はパレスチナのガザ地区でイスラエル軍の攻撃が行われている最中に実施したが、全員が自分の人生にとって大きな意味のある体験だった、考え方は違っても一緒に過ごせることに気づいた、という感想を寄せた。小規模で草の根的活動ではあるが、市民連携・国際相互理解、ひいては平和構築の根源に触れる活動であり社会的な意義は大きい。

参加者達には環境問題やコミュニティ創生を考えさせるプログラムも組み込まれており、持続可能な社会づくりに主体的に係わっていく若者達を育成する点からも社会的な意義を見出すことができる。

こうした活動を高く評価し、今後益々の活躍を期待して本賞の授賞を決定した。

<受賞団体からのコメント>



小さな草の根の活動ですが、国際交流基金をはじめ、多くの方々のご支援によって、活動を重ねることができました。同じ世界に生きる若者として、世界や地域の課題を共に見つめ、社会に貢献しようとする三地域の若い人たちの成長ぶりを評価頂き、今回の受賞は、彼女・彼らの励みになることでしょう。今後も、若い世代が里山で共に学び、行動する“人”のネットワークが広がるよう、活動を続け、一緒に成長していきたいと思っております。

■受賞団体 2: 公益財団法人 山本能楽堂

～国際交流で伝統芸能の可能性を広げる～

- 【所在地】: 大阪府大阪市
 【代表者】: 代表理事 山本 章弘(やまもと あきひろ)
 【設立】: 1927 年
 【ウェブサイト】: <http://www.noh-theater.com>



<贈賞理由>

山本能楽堂は 1927 年に建設された大阪最古の能楽堂である。2006 年には国の有形文化財の登録を受け、2009 年に内閣府から認可を得て「公益財団法人 山本能楽堂」となり、大阪における能楽の普及と継承を大きな柱として活動を行ってきた。現在では初心者を対象とした能の公演と普及・啓発活動、上方伝統芸能の普及と継承、外国人や子供たちへの能楽の普及・啓発、新作能によるアウトリーチ活動、東欧諸国での海外公演や外国人対応の充実、能のアプリ開発など多彩で精力的な活動を行っている。

能は中・東欧ではほとんど紹介されてこなかったが、山本能楽堂は 2008 年にブルガリアから能の研究のため来日したペトコ・スラボフ氏から、中・東欧地域で「本物の日本文化」が渴望されていることを知り、同地域で能を通じた文化交流を実施してきた。単に一過性の公演を実施するのではなく、現地の人々と一緒に作り上げる草の根的な交流を心がけ、ブルガリア人 10 名が稽古を重ね出演する能「紅葉狩」公演を 2015 年にブルガリアで実施して大きな反響を呼んでおり、草の根の市民連携による相互理解促進のモデルケースといえよう。

2008 年、ブルガリアから始まった海外公演は東欧諸国に広がりを見せており、日本の伝統芸能を通じた国際交流としての活動も今後益々発展する可能性がある。

また、新作能「水の輪」の創作と国内外での上演は環境問題をテーマに現代社会に訴えかける内容であり、外国人や子供も演者として参加できるという仕掛けによって、単に古典芸能を守るということにとどまらない先進的な取り組みとなっている。

山本能楽堂がスラボフ氏と協働で開発している、能の楽器演奏を体感できるアプリ「OHAYASHI sensei」は誰でもお囃子を体験でき、デジタル時代に対応した、子供や外国人などにも能を身近に感じてもらえる独創的な取り組みである。

こうした活動を高く評価し、今後益々の活躍を期待して本賞の授賞を決定した。

<受賞団体からのコメント>



栄えある賞を受賞させていただき、これまで活動にご協力して下さったみなさまに心より感謝申し上げます。世界が急速にグローバル化し、その距離が縮まる中で、文化を介した国際的な相互理解が今まで以上に必要な時代になってきたと実感しています。日本人の心が残されたユネスコ世界無形遺産の能楽の魅力を伝えていくことで、世界の平和へと微力ながら力を尽くしたいと思います。

■受賞団体3: 特定非営利活動法人 神戸定住外国人支援センター(KFC)

～定住外国人の自立をサポート～

- 【所在地】: 兵庫県神戸市
 【代表者】: 理事長 金 宣吉(きむ そんぎる)
 【設立】: 1997年
 【ウェブサイト】: www.social-b.net/kfc



<贈賞理由>

神戸定住外国人支援センターは、阪神・淡路大震災を機に1997年に発足し、外国人が多く暮らす神戸市長田区で相談活動を始めた。相談から浮かび上がった課題を丁寧に分析し、定住外国人の子供たちへの学習支援や奨学金の設立、地域で働く外国人住民への日本語教室や日本語教材の作成・提供、外国人高齢者の民族性や歴史的背景を尊重した居場所づくりや高齢者介護事業へと活動の幅を広げていった。

外国人のための活動は、文化背景ごとに分化しがちだが、同センターは国籍や民族のちがいを超え、在日コリアンやベトナム人などが地域で活動をとにもできる貴重な場である。幼児から自宅での暮らしが困難な高齢者までを対象とした事業を展開する同センターは、兵庫県下の特定非営利活動法人の中でも最大規模であり、利用者も延べ総数で年間3万人を超えており、これまでの利用者総数は35万人に達する。

日本で暮らす外国人は200万人を超え、そのうち永住者資格を持つ人が半数にのぼる。日本で子育てをし、年老いていく外国人の数は、これからも減ることはなく、住民として、外国人もともに豊かな生活を送ることができる地域づくりがこれからの日本にとって急務となっている。在日コリアンの青少年や高齢者への支援の経験が、ベトナムから難民として渡ってきた人々への支援や中国からの帰国者への支援に活かされている同センターの活動は、地域における共生社会の先駆けとして、他地域のモデルとなるものである。

地域で暮らす人々にしっかりと寄り添って活動してきた軌跡は、戦後70年、日韓国交正常化50年、阪神・淡路大震災から20年の節目が重なる2015年度の本賞受賞団体にふさわしい。

現在同センターの事業は、在日マイノリティの直接支援に留まらず、共生に向けた地域社会の意識変革を促す研修会を自治体・国際交流協会と共催するなど、課題解決にむけた意識づくり、システムづくりも視野に入れて展開されている。

これからの日本における多文化共生社会形成のモデルとなる同センターの活動をより多くの日本人に知らしめることに深い意味があると考え、本賞の贈賞を決定した。



<受賞団体からのコメント>

この度、地球市民賞をいただけたこと大変感謝しております。阪神・淡路大震災後ははじめた活動を、私たちは外国人と日本人がともに支え、担い、発展させることができました。言葉が通じなくとも、文化が違っても、人への共感や思いやり、やさしさは、国や民族を超え共に支える場を作っています。多文化な人が集い進める事業には、さまざまな困難がありますが、ともに支え生きる社会の尊さをこれからも広げていきたいと思っております。